

キュ・ブラ・ロスの晩年に、思いを馳せて...

昨夜、「死の瞬間」等で著名なキュ・ブラ・ロスの晩年の様子が、「最後のレッスン～キュ・ブラ・ロス・死のまぎわの真実～」のタイトルで放送された。キュ・ブラ・ロス(今年8月逝去)は、がん等で死に向き合う1万余の患者に寄り添う中で、死に向き合うその心情過程を明らかにし、世界中から「死の専門家」と称された精神科医であった。

晩年脳卒中を患い動けない体になっただけに、彼女が自らの死にどう立ち向かっていたか、彼女の最期からのメッセージは何かは、必然的に注目される場所であった。

晩年のインタビューの中で、「日中15時間、頭が冴えているのに動けないこの姿勢でじっとしているのは、楽しいと思う？ だから私は神をヒットラと呼ぶの！」というような時期もあったよう。こうした晩年の彼女から、死に直面し心のありようのような神のお告げ的な言葉を彼女に期待した多くの人々は、去っていったという。患者に対し、死に向かい、辛ければ辛いといい、哀しいなら哀しいと、その時のありのままの心情のありようを口に出すことを勧めていた彼女にすれば、自らもそのままに生きていたということであろうし、スピリチュアルな苦しさからの解放は、人から教えられることでなく、自らが解放し得ないことを伝えたかったのではないかと私は思う。

「死は人生で最も素晴らしい経験にもなりうる。そうなるかどうかはどう生きてきたかによる。」という、彼女の言葉に伺えるし、放送タイトルの「最後のレッスン」にも伺える。当HPに記載した「人生の着陸の操縦法をどう学びますか？(バックナンバ-随想等関係() P 2004.12.17.:参照)」にも通じることかなと思う。

晩年のインタビューの中で、「死後、どう云われたいか？」の問いに、「自分に正直な人であった。自分を偽ったことは、一度もなかった人であった。」と答えていた。

「日々、あるがまま、なるがまま、自ら納得する日々でありたい」と、私は願ってはいるが.....。

最期は、子ども、孫に囲まれ、講演等で忙しく世界を駆けめぐり家庭すら犠牲にせざるを得なかった彼女の人生の中で最も安らいだ表情の日々であったという。人は、人との係わり合いの中にこそ、心の安住の場があるということか.....。

(2004年12月26日記)